



ねこみ

猫 義 通 信

平成五年
(1993)
十月十五日発行
(年四回発行)

発行人 東 明 雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東 明 雅 方
Tel. 0471-75-1192

楳 郁 の 連 句

東 明 雅

加藤楳郁の死を知ったのは七月三日、富山県井波町で開催された全国連句大会を終り、帰宅しようの特急「かがやき」に乗った時であった。「巨星墜つ」の感にうたれ、哀悼の情に耐えなかったことを記憶している。

『俳句研究』十月号に「楳郁の連句」という一文を八木荘一氏が書いておられる。その文章と、引用された流火・楳郁両吟家苞の巻を読んでの感想を述べてみたい。尤も、この家苞の巻は半歌仙であるが、引用は表六句のみである。昭和五十四年十月の『加藤楳郁読本』には半歌仙全部が解説つきで出ているそうであるが、解説を見るには及ばないし、また、表六句を見れば、大体その作品の出来ばえは判定できるものなのである。

そも／＼の初めは紺の紺かな 流火
けはひはあれどいまださ、啼 楳郁
曇り日の葉を色／＼に漬けてみて流火
またも顔出す母のひと言 楳郁
忘れぬし月はしばらく軒を馳 同
わりなき旅にをどり借らるる 流火

発句に無季の句を採用することは、芭蕉も憚り、私も賛同できないのであるけれども、深い考えがあつてのことであろう。解説を読んでいないのでその理由は分からないし、また脇の句にこめられている「深い相手への挨拶」というのも分からなかった。

問題は第三からである。流火氏は何故にここに「曇り日」という気象をもって来られたのか、打越の五句目は月の定座で天象との打越になるのは明白であるのに疑問である。楳郁もあるいはここが月の定座であることを忘れていたのかも知れない。「忘

れぬし月は……」という発想はどうもそこから来ているのではなからうか。忘れていようといまいと、この月の句では第三の「曇り日」の気象との打越を免れていない。第三については、この句が胸切れであることも問題であるが、「色／＼に」という疊語は、発句の「そも／＼の」という疊語に差合わないであらうか。さらに言えば、発句・第三の上五が、いずれも「そも／＼の」、「曇り日」となっているのも、気にかからないであらうか。発句がもし人情自の句の意味があるとするならば、第三の自の句と打越になっているが、この点はいかがであらうか。

次に四句目であるが、この句の「母のひと言」は音声である。脇の「さ、啼」も音声である。これも打越であらうが、この作品、表六句の最も致命的な欠陥は、脇・第三・四句目・五句目と四句にわたって場所・情景・気分がちつとも変化していないことであらう。

八木氏の言によれば、楳郁の連句は殆んど発表されていないという。それは俳人楳郁の連句に対する謙虚な気持からの遠慮であらう。私は連句に対して傲慢でない楳郁の態度に流石一流俳人と感服するものである。

ジャズと連句

小原 洋一

ジャズの演奏形態は、概ね小編成と大編成の楽団に大別されます。前者は、ソロを始めた七、八人のプレイヤーに依るコンボバンド（以下コンボ）、後者は十五、六人のバンドから、弦を加えたフルオーケストラ迄のビッグバンド（以下フル）、こ

れ等に中間のナイン・ピース、テンピースと呼ばれる九、十人の編成が有ります。コンボは、さしずめ独吟・両吟と云ったところで、主に個としてのインプロヴィゼーションに依り、その構築は個々で行い、自由な中で緊張を醸し出します。フルは、作・演出者に依る譜面が有り、捌きに当る指揮者が居て、音響からアーティキュレーション迄細かく気を配ります。各プレイヤーや、各セクションの個性を引出す事も重要な役目になります。連句の宗匠に良く似ておりますが、これ等はジャズの監督や会社経営者にも通じますので、殊更云う迄も無く、宗匠が諸事の要に通ずという事でしょう。

ドラムのシンバルレガートが始る、ピアノが立上り、立止り、そして泳ぎ出す、ドラムが前に出る、クラッシュシンバルのアタック、ピアノが退く、一瞬の間、ベースがうねり、横切る……

ジャズのかげ合いは、この様に展開します。そこには、怒声、罵声、羽毛で頬を撫でるような優しさ、慈しみ等が相俟って、いつしかナルシズムから離れ、共有の空間を削り上げて行きます。これ等は編成の人数に関係無く、ソロの場合は自己対話し、指揮者の居るフルでは、ソリストやセクション同士の対話となります。

連句の付け合いは、ジャズのかげ合いに似て、各々の付け合が各々に響き合い、転じ、驚かされてうろたえたり、勢い込んで往なされたりと、一概に駆引きとは云えぬぶつかり合いの中で、言葉が跳びねね、握手をします。この連句の付け合いが、ジャズライヴのかげ合いと共に、同様の臨場感を生み出すのです。

でもね、ジャズマンで、夜店のステッキなんだよなあ。(ミュージシャン)

『芭蕉の恋句』によせて

梅田利子

七月の初め、たまたま神田の三省堂に入
ったら新刊本の書名の上に『芭蕉の恋句』
がのっている。はっとして手に取ってみる
とまぎれもなく東明雅先生の名著『芭蕉の
恋句』の復刻版だった。ご存知の様に新書
版のこの本は絶版となっており、古本屋を
捜しても中々見付からないと嘆かせていた。
この度岩波書店の八十周年を記念して、新
書版の江戸時代関連の本の中から、名著二
十冊が選ばれて装丁も新たに活字も大きく
読み易い特装本として刊行された。その中
に先生の『芭蕉の恋句』が復刻された事は本
当に嬉しい限りである。

恋は歌仙ですます桃青

桐雨

一生結婚もせず、唯ひたすら清僧の如く
旅を友とした芭蕉。しかし俳諧の上ではお
びたらしい数の恋句を残している。

この本で先生は、五つの年代に分類して
多くの句を引用しながら、芭蕉の恋句の変
化していく様子を大変解り易く説明してお
られる。(一)は貞門談林時代、(二)は貞享時代、
(三)は元禄元年二年、(四)は元禄三年、(五)は元
禄四年から没する七年まで。

私達はA・C・Cの先生のご講義で(一)以
後の作品にはしばしばお目にかかっている
が、(一)の桃青時代の句を引用すると、

あ、誰ぢや下女が枕の初尾花
百にぎらせてたはぶれの秋
後家を相手に恋衣打つ
去る男かねにほれたる秋更けて

桃青

桃青

「きぬぎぬのあまりかばそくあてやかに」
という様な浪漫的抒情句を見慣れた者には、
この様な享乐的な句を見ると同じ芭蕉の句

かと驚かされる。

この様に談林時代は「おかし」を中心
にしているのに対し、(二)以後「冬の日」以後
の作品は「あはれ」に転じて、今までの恋
の語彙だけに頼っていた句から、前句の余
情に付ける手法、余情付が完成し、そして
晩年の軽みへと発展して行く。

さて、この様な恋句における「おかし」
「あはれ」は平成の恋句ではどうなのであ
ろうか。江戸時代とは恋の事情も大きく様
変わりして、女性の恋は秘めることよりむし
ろ積極的に表現する方へ、男性は逆に女性
の顔色を伺わねばならぬ時代になった。こ
うした世情の中で恋の句も大胆になり、表
現も、抱く、裸体、口吻けなど、芭蕉の恋
句では見られない肢体の表現が目につく様
になったのも時代の反映である。

ある意味では談林らしさを覗かせながら
「あはれ」「おかし」が付け合わさって一
巻を盛り上げているのが平成の恋句の特徴
のような気がする。

一糸まとはず湖に抱かれ
真白き下着にしとど夜の梅雨(たかな)

だまされて泣くのも今は男なの

思いでの鍵抽き出しの奥 (盆の月)

夏瘦せしたねとそとと囁く

遊学の果の同様知らぬ親 (藤の風)

(猫装作品集Ⅲより)

連句一卷を巻く時、恋句は山場となる事
が多いだけに連衆それぞれ秘術を尽くして
面白さも最高に盛り上がる場所であるが
俗に入りて俗に墮さない芭蕉の恋句のすば
らしさを、現代的な付味で少しでも再現出
来たらと思うのである。

蕪村曰く「三日翁の句を唱ぜざれば、口
むばらの生ずべし」。口中雑草の生えぬ様
せめても座右の書としたいと願っている。

瀟落葉

桑原 正敬

五味 啓子

連句を夫婦で楽しむということは、経済
大団にしては、珍しいことらしい。

「夫婦で連句をはじめた動機は何ですか」
よくこんな質問を受ける。「家内が勧める
ものですから。私は瀟落葉なんです」。私
の返事は、常にこの一言である。相手は多
少妙な顔をするが、それ以上は追求してこ
ない。答えとしては、妙を得ているらしい。
私は若い頃、ドイツ語や法律を学んで、
こち／＼頭になつて来た。結婚して、まづ
妻の会話が気になつた。「主語を用いない
語法、意味不明な代名詞の多用」等など。
そこで、私は妻の教育を思いたち、初歩
の論理学の本を買ってきた。早速、定義の
厳密さを示すため、「白馬は馬にあらず」
という命題から始めた。

妻は眼を白黒させていたが、健気にも、
嫁しては夫に従う、の家訓を実践しようと
一生懸命付合ってくれた。だが、妻のもつ
て生れた天性は、私の教育になじまず、遂
に所信を放棄した。

短歌、俳句その他諸々の文芸を楽しむ者
にとつて、三段論法等は、所詮、無味乾燥、
無用の長物ということであらう。

銀婚式を迎える頃、今度は私が妻の教育
を受ける立場になつた。「頭を少し柔らか
くしたら」。その頃、私は趣味として、考
古学に熱中していたが、ある仮説を樹て、考
古学を演繹帰納する、それに当って、発想
の飛躍又は転換が必要であることを、屢々
痛感していた。私は妻の勧めに、素直に応
ずることにした。まづ公民館俳句をなめて
みた。あまり美味とはいえなかつた。「そ
れでは連句をやつたら」。私は終に完全な
瀟落葉となつたのである。

連句を始めて変つたこと

人は加齢と共に心身が硬化するという遊
けて通れない生理現象を、身を以て実感さ
せられる歳になつて、連句に出遭いました。
そして連句の楽しさを知つたのは勿論で
すが、「人生をしなやかに生きるための心
得」という素敵な付録を頂きました。

「心得」のそもそもは連句の三句目の転
じから始まりました。A・C・Cの教室で
仲間達との座で、思い切りのよい、鮮やか
な転じの句に、鈍な私は幾度眼を開かれた
ことか知れませんが、そこで人生という一巻
にも、三句目の転じが大切ではないかとい
う思いを深くしたのです。

山あり谷ありの人生ですが、山も谷もず
るずると引きずらないで、二句で止める事
そして三句目で転じをすれば、図に乗って
失敗をすることも、地獄まで落ち込むこと
もない。肩の力がすつと抜けました。

でも、連句でこの肩の力が如何とも入
ってしまうことがあります。付句の思案の時
で、苦心の末、畢生の作が出来ても、取り
上げて戴けない場合があります。どうして
という口惜しさは他の人の、一巻の流れに
釣合つた句を見て、成程と納得させられま
す。飛躍的な言い方をすれば、バランス感
覚が自ら養われるということでしょうか。

バランス感覚が良いと、今の世の中で一
番難しいとされている人間関係がスムーズ
に行くこと必定で、連句人口が増えれば世
の中、もっと暮し易くなると思つていま
す。その他、現身では不可能な恋がさりと
やつてのけられたり、初心者私、連句の
勉強を深めると共に「人生をしなやかに生
きる心得」その二、その三を会得中です。

熱田神宮法楽俳諧

九月二日、熱田神宮において法楽俳諧が興行されました。名古屋A・C・Cでの連句講座（講師 式田和子）の終了に合わせ、桃雅会の連衆を中心に企画されたものです。

当日は朝からの小雨。静まりかえる熱田神宮の境内を、神主さんに導かれ、先ず関係者一同拜殿にて興行の無事を祈念しました。

会場となった龍影閣は、明治天皇の御座所が保存されてある明治十一年「名古屋博物館」の折の建物。床の間には神宮のご好意で烏丸光広の書が懸けられました。

興行に先立ち、東明雅先生より正式奉納俳諧の意義、熱田神宮での法楽俳諧の歴史についてお話がありました。

連歌は神々への法楽・奉納、安産・元服・賀算などの祝言、出陣・凱旋・疾病・天災、あるいは故人の追悼・追善・年忌の弔いにも執り行なわれたものであり、会席には菅公天神の画像が名号がかけられ、花を立て、その前に文台と円座を設けて執筆の座とした。そして、この連句会の法式を俳諧に取り入れたのが松永貞徳であるとのこと。

正式俳諧では又、掟書きというものが飾られます。式場の設営の間、名古屋連衆の何人かの方が、明雅先生のご説明に頷いている和やかな光景もありました。ちなみに掟書きには、

- 一 諸禮停止
- 一 出合遠近
- 一 一句一直
- 一 雪月花一句

右三ヶ條

舊式也

名古屋は俳諧が盛んなところであり、熱田神宮では寛永八年五十韻興行、さらに寛永十三年には法楽俳諧万句興行が執り行なわれ、その記録も残っております。

桃雅会の方々が熱田神宮で正式俳諧をしたいと申し出られた時、血が騒ぐのだからと明雅先生は感慨を深くされたそうで、こういう催しをされることで、熱田大明神もこれを大切にしてください方も、きつとお喜びになることでしょうと話されました。

蓬来にこの神在し豊の秋

明雅

俳諧興行の始まりです。興行の準備も全て調い、雨にもかかわらず、熱心な見学の方も大勢お出ででした。テレビの機材も入ったりで、張りつめた空気が流れる中、配硯・献花、文台捌き、俳諧興行、花の句、端作りと、静かに、ドラマチックに進行します。満尾した一巻が、執筆杉山壽子さんのよく通る吟声によって読み上げられる時、しみじみと充実感を覚えました。

硯を収め、知司の、「これにて正式俳諧興行を終了いたします」という言葉で、みなさん本当にホッとされた様子。関係者の方が気持ちの一つにされ、短時間でこれだけの興行をされたことに感激しました。

興行の進行は、猫養の式田和子さんが、マイクで適宜解説を入れるという形を取りましたが、初めての参加者には執筆の所作の意味やつながりなど、分かりやすく良かったですと好評でした。

うたごころの原初にふれる、貴重な体験をさせていただき、法式がきちんと伝えられていくことの意義深さを感じさせられた一日でした。（佛淵・記）

「猫養作品集Ⅳ」作品募集

- ▽ 捌は猫養会員のこと。但し猫養会員以外の人が連衆に加わることは妨げない。
- ▽ 歌仙・二十韻夫々同一人捌一薦のこと。半歌仙応募の方は二十韻はご遠慮下さい。
- ▽ 応募用紙は四百字詰原稿用紙（B4判）使用のこと。
- ▽ 文音の場合A↓B・B↓Aは一巻のみ。
- ▽ 平成五年の作品のこと。
- ▽ 応募締切日 平成五年十一月三十日。送り先

〒二七七 柏市加賀2-12-11 梅田利子
TEL 0471-7218119

S S S S S S S S S S S S S

☆ 新宿連句会発足 ☆

「クロスワードパズルより面白い連句を始めませんか、云々」というお知らせを、新宿区報へ依頼しました。こんな楽しい連句を一人でも多くの方に知って貰いたいと願って……

第一回目は、去る九月十八日、十六名でスタートいたしました。第三土曜日、17時5時まで、新宿区の赤城教育会館でやっております（最寄駅 東西線神楽坂駅）。

◇連絡先・小林千雪・倉本路子
「楽しい会にしましょうね」とおっしゃる秋元正江先生の御指導です。初心者大歓迎です。よろしくお願いたします。（倉本）

猫養会員名簿（平成五年四月）の訂正

小川真貴子 ↓ 小川真喜子
塚本素子 ↓ 塚本泰子

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

二口 今宮水壺

（敬称略）

◇ 発展基金は随時受け付けております。よろしくお願致します。

振替口座 東京31550348
猫養同人会

* 連句とさかな *

まんぼう 杉江 杉亭

皆さん、まんぼう（翻車魚）をご存知ですか。北杜夫のドクトルまんぼうシリーズでおなじみのあのまんぼうです。

湯河原に滞在中の某日、行きつけの小料理屋からまんぼうが手に入ったとの連絡があり、待望のご対面となりました。

やがて出されたまんぼうの刺身は白身で薄くピンク色がかっていました。さぞや運動不足で身はたるみ水っぽいうような筆者の予想は見事に外れ、身は堅く、しこしこして結構いける味でした。これはお見せしましたという訳で初物の味にお酒も進んだ次第。

（蛇足）多産の王者で一回に二億〜三億粒卵を生むという。因みに鱈は五万粒とか。この多産のお蔭で縁起物とされている。

【Q】 俳席では、「これはすりつけだからいい」というようなことがよく言われます。「宮島」「瀬戸内海」といった地名に地名の付などはどうか、「付き過ぎ」ということは矛盾しないのかなどについてお教えください。(遠藤 央子)

【A】 すりつけ「摺付け」とは、去嫌いの関係にある語でも、それを二句続きで出す場合は認めるというものです。ところで昔は地名と言った分類はなく、国名と名所(歌枕)、それに歌に詠まれない所は所名と呼ばれました。これらすべて二句去りです。これらはすりつけで二句続くことができます。

芦丈先生の口伝によれば、「大名所に小名所はつく、先に大きな地名が出ていれば、それから枝のようなものが出る」と教えられました。それによれば、宮島は小地名、瀬戸内海は大地名ですから具合が悪いと考えられますが、芭蕉の作品の中にも、

- (一) 三線借らん不破の関人 重五 道すがら美濃で打ける暮を忘る 芭蕉
- (二) 舟並べたる松本の春 北の方若狭境に残る雪

(元禄三「引き起す」の巻)

などの例があり、不破の関は美濃にくらべて小地名でしょうし、松本(琵琶湖畔の地名)は若狭にくらべては小地名でしょう。付心次第では、このようなことも可能ですから、宮島——瀬戸内海の場合も、実際にその句がどんなものであったかを知らない以上は、付くか付かないかが判別できません。

さらに、「地名のすりつけ」と「付き過ぎ」との関係ですが、「付き過ぎ」とは、

前句と付句との意味や味わいが近すぎることを言います。前句にも地名があり、付句にも地名があつて、一見近すぎるように感じられますが、(一)では、付けはその人の付けであつても、前句の旅人を一所不住の驛客と見て、その囚われぬ心境を付けていて、一概に付け過ぎとは言えぬでしょう。

また(二)の例では、賑かに湖岸に舟の並ぶ松本(現在大津市)の春、長閑な春色を染しむ気持が横溢しているのに対して、付句は、湖南から遙かに北の方を見ると、若狭境の山々にはまだ雪が残つて、春の遅い北国の暮らしを思いやつており、これも決して「付き過ぎ」とは言えないでしょう。

だから、「地名のすりつけ」があるから、すぐにその付合は「付き過ぎ」と判断することはできません。宮島と瀬戸内海、それぞれの地名が、どのような付心で、結びつけられているのか、そして、どのように表現されているかを知らない限りは判定できないところでありませう。

芝櫻川町の街騒社に小笠原樹々を訪ねたのは昭和四四年八月二八日。色々の話を伺う。

俳諧往来 小笠原 樹々

杉内 徒可

「新派で連句をやるのは樹々一人だ。宇田零雨の連句は古い世界をうたうだけ。芦丈は旧派でダメ。都心連句会に一度出たが、捌きの牛耳が私の出句を直したのはけしからん」など……

樹々が怪しからんと云つたのは都心連句歌仙「菊観賞」(昭和三七・二・五)のことだが、兎に角、都心連句会への悪口を沢山聞かされたので、すすめられた樹々著「連句といふもの」、連句雑誌「街騒」の四冊を買つて早々に辞去した。

その後度々、街騒連句会出席を電話でさそわれたので、翌年二月二八日茅場町の三井銀行四階の会場へ出かけてみると、華北塩業(株)清算事務所という看板が出ている室だった。

連衆の伴野溪水は元大蔵省の高官でこの室の主。野口里水は『溢柿』編集者などで、欠席者の宮下太郎、戸板黒猫子の話が出たのを覚えていた。

樹々主幸は先祖が命名者である小笠原島で近く漁業会社を始めるといふ景気のいい話をされた。樹々は妹照子が近衛文麿の叔父英麿の夫人という関係。京大時代の文麿と仙台の二高時代は殊に親交があつたという関係から、近衛さんの秘話に詳しかったのにひかれ、三月、四月、五月と出席したが、五月の例会が街騒連句会の最後となつてしまった。

その五月十六日、樹々は欠席。溪水の話によれば、樹々は小笠原島の事業資金を度

々借りにきていたが、今月の初めに、今度は黒真珠の養殖をやるので船賃の片道の五百円を借りたいと云つてきた。兎に角様子がおかしいので、涼しくなるので休みにすると云つた。

終りに、樹々から「旧派でダメ」と評された根津芦丈の樹々評を記しておく。

小笠原樹々が「街騒」といふ俳誌を出して居る。連句と発句とを奨励して居ることはよいが、連句は本を讀んだ研究だけで師を持たぬ人であるから其の本質を解して居らぬ。連句を知らぬ人だけが見て居れば無難であらうが、知つて居る人が見たら龍を描いて晴を点じない所か、その髭も脚も書落して居る様な所が到る所に在る。

(「芦丈俳話」)

編集部より

○ 風狂の旅始まるや竹の春 熱田神宮に参る折の新幹線車中時、明雅先生の発句です。詩の切り羽に立つ俳諧師の姿を見ました。

○ 天候不順による記録的な米の不作が伝えられています。吟醸米は産地が別だからあれはそうでもない筈など、左党のとりざたも実感がこもります。

○ 10/30/10/31の「とよた連句まつり」でのいろいろな出会いが楽しみです。



季刊「ねこみの」通信 第十三号
発行者 猫養連句会
印刷所 アトリエ・ネオ